

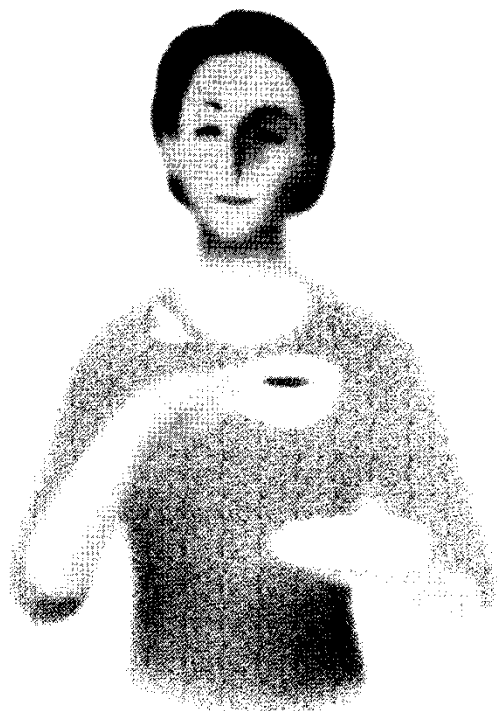
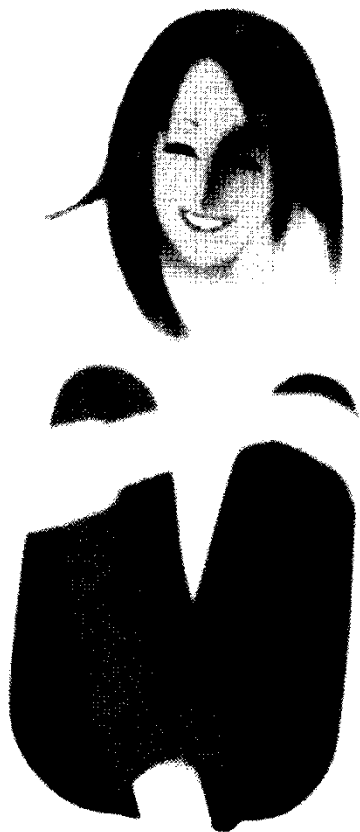
2004年から子宮頸がん検診の対象を
20歳以上の女性に広げました。
2年に1回の受診となります。



生涯にわたって健やかな女性であるために

あなたを守りたい

子宮がん検診



子宮がんには頸がんと体がんの2種類があります

子宮頸がん

頸がんは検診により進行がんを防ぐことができます

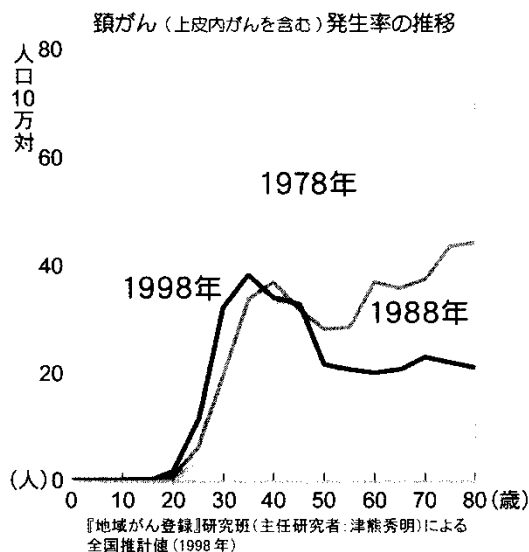
頸がんには検診が非常に有効で、進行がんを防ぎ死亡を減らす効果が証明されています。多くの先進国ではほぼ例外なく、子宮頸部細胞診による検診が行われています。欧米での受診率は高く、たとえばアメリカでは、18歳以上の女性の86%が過去3年以内に1回以上検診を受けています(2002年)。一方、日本では過去1年以内に受けた女性は15%足らずにとどまっています。



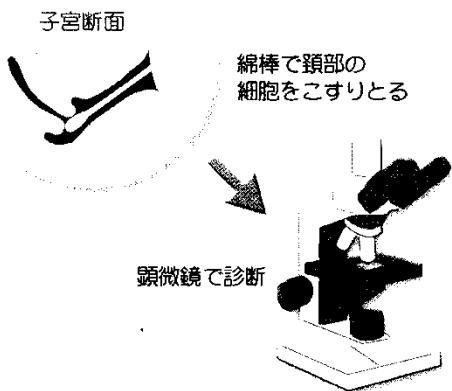
頸がんは20歳代の若年層では急激に増えています

頸がんは、粘膜表面にとどまる上皮内がんと、粘膜より深くひろがる浸潤がんからなります。上皮内がんを含めた頸がんの発生率は、50歳以上の中高年層ではこの20年間で順調に減ってきていますが、逆に20~24歳では約2倍に、25~29歳では3~4倍に増加しています。

これは、頸がんはヒトパピローマウイルス(HPV)の感染が関与しており、高齢になるほど多くなる他のがんと違って、性活動が活発な若い年代での感染の機会が増えているためと考えられます。



子宮頸部細胞診によってがん細胞を見つけます



細胞診は、子宮頸部の表面から綿棒などでこすり取った細胞を顕微鏡で調べます。

受診者の約1%の方が精密検査が必要となります。がんの発見率は約0.06%(2002年)です。精密検査が必要な方の中では約10%弱と非常に高率にがんが発見されます。これらのがんの60%以上は、粘膜の表面のごく一部だけにとどまる上皮内がんなどごく早期のがんで、その大半は子宮を温存した治療が可能です。早期発見のおかげです。

子宮頸がんとう子官体がんの違い

頸がん

子宮のどの場所に行けるのですか？

体がん

●頸がん：
子宮の入り口である頸部の上皮
(表面の細胞) から発生します。

●体がん(内膜がん)：
子宮の奥にあたる体部のうちの内膜
から発生します。内膜は生理の時
にはがれてしまうので、閉経前の
女性には体がんの発生は多くあり
ません。

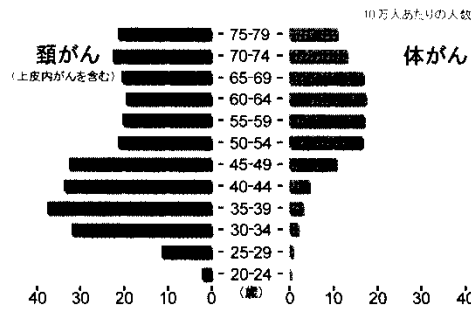


子宮頸部

何歳の人に多いのですか？

部位別・年齢別にみた子宮がん発生率

- 30歳代から40歳代で多く診断されています。
(10万人あたり30~40人)
- 40歳以上では年々減っていますが、20歳代から30歳代では逆に増えています。
- 1年間に約7,000人が診断され、約2,000人が亡くなっています。



- 50歳代から60歳代で多く診断されています。
(10万人あたり15~20人)
- 以前は少なかったのですが、全ての年齢層で年々増えています。
- 1年間に約5,000人が診断され、約1,000人が亡くなっています。

『地域がん登録』研究班(主任研究者:津熊秀明)による全国推計値(1998年)

どんな人がなりやすいのですか？

- ヒトパピローマウイルス(HPV)の感染が発がんとう強い関係があります。よって、活発な性活動や、性交渉の相手が多いほどリスクが高くなります。
- また妊娠・出産回数が多い方ほどなりやすいといわれています。
- 喫煙者でもリスクが高くなります。

- 閉経以降にリスクが高くなります。また、ホルモン補充療法を受けたり、子宮内膜増殖症がある方などでなりやすいといわれています。
- 不規則な月経の方、無月経や排卵異常のある方、妊娠や出産の経験がない方がなりやすいといわれています。
- 肥満、高血圧、糖尿病のある方ではリスクが高くなります。

子宮体がん



体がんは症状があつたら病院を受診することが重要です

体がんに対する検診方法としては、体部細胞診が一般的ですが、体部細胞診によって体がん死亡を減らせるかどうかは、はっきりしていません。体がんは、病状が進行していない早期の段階で出血をきたすことが多く、不正性器出血での発見が約90%といわれています。少量でも出血があれば、すぐに医療機関を受診していただければ早期発見が可能です。下着にしみが付くことや下腹部痛も出血に次ぐ症状です。

子宮頸がん **Q** **A**

Q. 精密検査はどんなことをするのですか？

A. コルポコープという拡大鏡で子宮頸部を観察し、あやしいところから米粒半分くらいの大きさの組織をとって、がんがないか詳しく調べます。少し出血しますが、ほとんど痛みもなく、婦人科の外来で受けられます。

Q. 妊婦が受けてもよいのですか？

A. 妊娠してはじめて産婦人科を受診するということが多いことから、妊婦健診時に頸がん検診を行うことも大事です。

Q. 妊婦に見つかったとき子宮は残せますか？

A. 検診で見つかる頸がんは大半が早期のがんで、とくにがんが粘膜表面だけにとどまる上皮内がんが主体です。子宮を残すことが可能な場合が多いです。

Q. 症状がある場合はどうすればよいですか？

A. 検診を待たずに、医療機関での診察を受けてください。次のような症状が1つでもある場合は要注意です。月経時以外の出血、茶褐色・黒褐色のおりものが増える、下腹部および腰の痛み、性交中の痛みなどです。

Q. 頸がん検診の受診を避けた方がいいときはありますか？

A. 正しい判定のためには、月経中と月経直後は避けてください。なるべく月経終了後3～7日の間に受診していただくのがよいと思われます。

Q. 2年に1回の受診でだいじょうぶですか？

A. 頸がん検診については、受診間隔を延長して2～3年に1回の受診頻度でも有効だとするデータがたくさんあります。欧米諸国では、3回連続して異常を認めなかった場合には、検診頻度を3年に1回とするなど、受診間隔を延長する国が多いのです。

Q. 予防方法は何かありますか？

A. 性交時のコンドーム使用はヒトパピローマウイルスの感染予防に有効です。また他の性感染症予防にも役立ちます。禁煙も有効です。

Q. ヒトパピローマウイルス(HPV)ってなんですか？

A. 性交渉で感染するウイルスです。100種類近くあり、そのうち10数種類が頸がんと関係があります。正常な人でも10%弱の方に見られますが、頸がんの前がん病変ではほぼ100%にみられ、頸がんの有力な危険因子です。性交渉の相手の数が多い女性ほど感染の危険が増えるので、頸がんのリスクが高くなります。HPVの感染を調べる検診法が開発されつつあります。

このパンフレットの内容は、「老人保健事業に基づく乳がん検診及び子宮がん検診の見直しについてーがん検診に関する検討会中間報告(平成16年3月)」に基づいています。

子宮がんや子宮がん検診について、更に詳しい情報をお知りになりたい場合は、以下のホームページをご覧ください。

国立がんセンターホームページ：<http://www.ncc.go.jp/jp/> (日本語トップページ)

<http://www.ncc.go.jp/jp/ncc-cis/pub/index/> (一般向けがん情報 各種がんの解説)

<http://www.ncc.go.jp/jp/ncc-cis/pub/cancer/010210.html> (子宮頸部がん)

<http://www.ncc.go.jp/jp/ncc-cis/pub/cancer/010209.html> (子宮体部がん)

編集：国立がんセンター がん予防・検診研究センター

このパンフレットは、平成15年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金により作成しました。
